

日本文化史4（近現代）

近代・現代の文化は、文学などのテーマや明治期の文化という形で出題されることもありますが、それ以外にある人物との関連で、文化に関する問題があわせて出題されることも多いですから、気をつけておきましょう。

1. 文明開化

1)思想

従来の儒学・国学に代わり欧米思想が導入された。その中心を担ったのは、1873年＝明治6年に結成された明六社のメンバーたちであった。なかでも福沢諭吉の『西洋事情』・『文明論之概略』・『学問ノススメ』や、中村正直の『西国立志編』（スマイルズの『自助論』の翻訳）・『自由之理』（ミルの『自由論』の翻訳）などが当時のベストセラーとなった。

（福沢だけは、福沢の選集を買って——とって、全集を買うほど、福沢をやろうと思っていなかったからですが——読みましたし、丸山真男の論文や、その他の研究者の人たちの本もそれなりに読みました。福沢は日本の近代思想を考える上では是非取り上げないといけない人物ですが、なにぶん、明治社会主義から攻めることになりましたので、レッスン程度でおしまいです。しかも、入れあげて、読まねばならない人のように私には思えなかったという理由ですが）

2)教育

政府は、富国強兵の目的を達成し、全国統一の実をあげるために学校教育を重視した。1871年、文部省を新設し、翌72年、**学制**を制定した。これはフランスの教育制度を模範とし、全国を8大学区に分け、1大学区に32中学区を設け、1中学区に210の小学区を設ける計画であった。その後、学制があまりに画一的すぎるという批判が高まり、1879年、文部大輔田中不二麿は、アメリカの制度を模範とした**教育令**を出した。しかし、この教育令は、学校運営を各地方の自主性に委ねるというものであり、あまりに自由主義的過ぎると批判が起こり、翌80年、文部卿河野敏謙が改正した。この改正により教育の国家統制が強まっていった。

3)宗教

1868年、復古神道の影響下にあった政府は、神道国教化のために**神仏分離令**を出し、奈良時代から続いていた神仏習合をやめさせた。これによって各地で廃仏毀釈運動が起こった。翌69年、神祇官が太政官の上に設置されると、神道国教化の動きは一層強まっていった。神祇官はその下に宣教師を率い、1870年には大教宣布の詔を発し、神道国教化を進めたが、政府が思うような効果をあげることはなかった。

キリスト教については、五榜の掲示に記されていたように、維新後も布教は禁止されていた。しかし、長崎では開港後大浦天主堂が造られ、公然と布教が開始された。これに対して木戸孝允が長崎に行き、浦上の信者を捕え弾圧した。事件後、欧米諸国は政府に抗議したが、政府ははじめこれに応じなかった。しかし、条約改正交渉に重大な支障があることを知った政府は、1873年、五榜の掲示からキリスト教禁止の高札を撤廃した。

4)生活文化

太陽暦が採用され、1872年12月3日を翌73年1月1日とした、同時に1日24時間制、日曜休日制も採用した。さらに、1871年には散髪脱刀令も出された。

(このことを教えていて、いつも話してしまったのは、当時の人たちはびっくりしたんだろうということです。だって、まだ、年末だと思ってすごしていたら、いきなり正月！です。

「え～！そんな馬鹿な～!!!」っていう状態じゃあなかったのかと思います。でも、それこそ後から知ったのですが、アジアの国々では、太陽暦はそれとして導入しながら、通常的生活習慣は、昔ながらの太陰暦で過ごしているのですよね。ベトナムで「テト」という旧暦＝太陰暦でお正月を祝いますが、これは太陽暦の2月初め頃で、ベトナムだけでなく中国や韓国でも、お正月というのは太陰暦の方が一般的なのです。この方が良かったかも知れないな、と最近思ったりします。季節とは太陰暦の方が合っているように思いますが…)

2. 明治期の文化

1)特色

江戸時代の封建文化を受け継ぎ、さらに欧米からの近代文化を取り入れ、近代資本主義社会にふさわしい新たな文化を形成していった。

2)思想

明治20～30年代になると政府の採用した欧化政策に対する批判的思想が登場した。1887年、民友社を設立した徳富蘇峰は、雑誌『国民之友』によって平民的欧化主義を説いた。この思想は、平民の力による日本の近代化を求めた思想であったが、蘇峰は日清戦争の際の三国干渉を機に国家主義へ転じていった。

翌88年、三宅雪嶺・志賀重昂らが政教社を設立した。彼らは日本固有の伝統的価値観である「真・善・美」を基礎に国民国家を形成しようとする**国粹保存主義**を説いた。その主張は雑誌『日本人』で展開された。また、陸羯南は新聞『日本』で、国民の統一と国家の独立を求めた**国民主義**を説いた。彼らの主張は、単なる右翼的なナショナリズムとは異なり、国民に基礎を置いた批判的ナショナリズムであったが、高山樗牛が雑誌『太陽』で説いた**日本主義**になるとその批判性は失われていったといえる。

3)キリスト教

キリスト教が解禁されて以降、当時の青年・知識人はその影響を強く受け、入信する者も次第に増加していった。その中で、近代日本のキリスト教の源流ともいえる熊本・札幌・横浜の3つのバンドが作られていった。バンドとは、プロテスタントを伝道するための布教組織であり、熊本バンドには海老名弾正・小崎弘道が、札幌バンドからは内村鑑三が、横浜バンドからは植村正久がいた。

4)教育

1880年、改正教育令が出された後、1886年初代文部大臣森有礼によって**学校令**（帝国大学令・師範学校令・中学校令・小学校令）が出され、国家主義的教育が進められた。さらに、1894年には高等学校令が制定された。義務教育年限は1886年、尋常小学校4年間と決まった。その後小学校令が1906年に改正され、6年間に延長された。また、1903年から小学校教科書は国定とされた。

1890年には井上馨が立案し、元田永孚が起草した**教育勅語**が公布された。これは天皇を中心とする国家主義教育の根本の指針を国民に示したものであった。翌91年、第1高等学校講師内村鑑三は、勅語に敬礼しなかったという理由で批判され、辞職した。さらに、1911年、国定教科書『尋常小学歴史』の南北朝併記が問題視され、第2次桂内閣は、教科書執筆者喜田貞吉を免官し、南朝を正統とした。

5)学問

近代学問の導入は、「御雇い外国人」教師によってなされた。なかでも法学のボアソナー、ロエスレル、モッセや大森貝塚の発見者モースは特に知られている。彼らの指導のかけもあって明治中期から後期にかけて学問の発達が目ざましかった。人文科学では、田口卯吉の『日本開化小史』やドイツ観念論を紹介した井上哲次郎らをあげることができる。

一方、自然科学では細菌学研究で業績をあげた北里柴三郎や、北里の弟子で赤痢菌を発見した志賀潔、アドレナリンを発見した高峰讓吉、オリザニン（ビタミンB1）を発見した鈴木梅太郎らが活躍した。さらに、独自の植物分類を行い、新種の発見をした牧野富太郎や、近代数学の開拓者菊池大麓らをあげることができる。

6)文学

明治初期の文学は、江戸時代の文学的伝統を受け継いだ戯作文学が盛んであった。代表者の**仮名垣魯文**の『安愚楽鍋』は、文明開化期の流行を描写した作品として知られる。明治10年代になって民権運動が展開されると**政治小説**が流行した。矢野龍溪の『経国美談』は、ギリシアの都市国家テーベの独立闘争を描いたものであり、東海散士の『佳人之奇遇』はアイルランドの独立を扱った物語であった。

西洋の近代文学が日本に導入される契機を作ったのは、1885年、**坪内逍遙**が著した評論

『小説神髓』である。坪内自身は、『当世書生気質』を著した。ロシア文学を学んだ**二葉亭四迷**は、言文一致体で『浮雲』を発表した。さらに、1885年、**尾崎紅葉**らが設立した硯友社は、雑誌『我楽多文庫』で、日清戦争前後の文学界の主流となった。同時期には井原西鶴の影響を受けた幸田露伴が『五重塔』を発表し、理想主義の代表作となっている。

1893年、**北村透谷**らは『文学界』を創刊し、近代的自我の確立と人格の自由を主張するロマン主義を説いた。ロマン主義はその後詩歌にも影響を及ぼし、与謝野晶子ら『明星』派に受け継がれていった。

日露戦争前後には、人生の現実を見つめる自然主義文学が台頭した。国木田独歩の『武蔵野』がそのはじまりで、ロマン主義から転じた**島崎藤村**の『破戒』や田山花袋の作品が知られている。しかし、自然主義文学は、その後、作者＝主人公という定式に立つ告白小説（私小説）に変化していった。

これとは別に、独自の作品を次々と発表していたのが、**夏目漱石**と**森鷗外**であった。漱石は自我の絶対的孤独を人間の本質として追求する『門』・『こころ』・『道草』・『明暗』などを著し、鷗外は、過去の人間の中に純粋な生の充実と幸福を発見する歴史小説『阿部一族』・『高瀬舟』・『洪江抽斎』などを発表した。

7)美術・建築

政府の極端な欧化主義政策によって日本の伝統的美術は衰退しつつあった。しかし、アメリカ人の美学者**フェノロサ**が日本美術の再考を説き、その影響下にあった岡倉天心が1887年、東京美術学校を成立した。教授には、狩野芳崖・橋本雅邦を迎えた。卒業生には横山大観・菱田春草らがいる。そして彼らを中心に1898年には日本美術院が設立された。

西洋画は、工部美術学校のイタリア人教師フォンタネージらの指導によって盛んとなった。フォンタネージに師事した**浅井忠**は、1889年明治美術会を結成した人物で、代表作「収穫」が知られている。また、1893年、フランスから帰国した**黒田清輝**を中心に1896年、白馬会が結成された。黒田の代表作「湖畔」などからも理解できるように、淡い色調を基本としており、このグループを外光派という。また、イギリス人ワーグマンに師事し、「鮭」を描いた高橋由一も同年代の画家であった。

彫刻では、**高村光雲**が「老猿」を作成し、1893年シカゴで開催された万国博覧会で優勝した。西洋彫刻では、フランスに渡りロダンに師事した**荻原守衛**が「坑夫」・「女」を発表し、朝倉文夫の「墓守」と共に有名である。

建築では、工部大学の**コンドル**が鹿鳴館・ニコライ堂を設計した。コンドルに学んだ辰野金吾は、日本銀行本店や東京駅を設計した。また、片山東熊は、赤坂離宮（現在の迎賓館）を設計した。

8)演劇

幕末から明治初期にかけて庶民は、依然として歌舞伎を楽しんでいた。この時期には、

河竹黙阿弥が文明開化の風潮を取り入れた「散切物」や「活歴物」とよばれるジャンルの作品を発表していた。その後、日清戦争前後には、9代目市川団十郎・5代目尾上菊五郎・初代市川左団次らが活躍し、「**団菊左時代**」とよばれる歌舞伎ブームが起こった。

また、民権運動の題材を演じる壮士芝居がはじまり、川上音二郎がはじめた「オッペケペー節」が人気を博した。日清戦争期になると壮士芝居は、家庭劇が中心となり、**新派劇**とよばれる演劇になっていった。西洋の近代劇は、坪内逍遙らによって伝えられた。坪内は島村抱月らと共に1906年、**文芸協会**を結成し、シェクスピアイブセンの作品を上演した。島村はその後、松井須磨子らと1913年、芸術座を結成した。2代目市川左団次と小山内薫は1909年、自由劇場を結成した。

9)音楽

西洋音楽は当初、軍隊と小学校で取り入れられた。1879年、伊沢修二は文部省内に音楽取調掛を設置し、アメリカ人メーソンを招いて音楽教育と洋楽調査などを行った。さらに伊沢は1887年、東京音楽学校を創設し、校長に就任した。この学校から「荒城の月」や「花」を作曲した滝廉太郎が育った。

10)ジャーナリズム

民権運動の武器となった政論新聞を「**大新聞**」と総称する。その中には『日新真事誌』（イギリス人ブラックの発行）や成島柳木・末広鉄腸の『朝野新聞』、西園寺公望が社長、中江兆民が主筆であった『東洋自由新聞』や自由党の機関紙『自由新聞』などがあつた。また、最初の日刊新聞でその後、立憲改進黨系の新聞となった『横浜毎日新聞』や前島密が創刊し、矢野文雄が買収し、改進黨の機関紙となった『郵便報知新聞』、福地源一郎を社長とする御用新聞『東京日日新聞』、福沢諭吉が創刊した『時事新報』などもあつた。

一方、娯楽性の強い大衆紙を「**小新聞**」とよぶ。子安峻が創刊した『読売新聞』（「読売」とは、江戸時代の瓦版のこと）や黒岩涙香が創刊し、幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三らを記者に迎えた『万朝報』や秋山定輔創刊の『二六新報』などがあつた。

3. 大正から昭和初期の文化

1)特色

大正から昭和初期の文化の特色は、市民（大衆）文化の繁栄である。都市人口の増加・教育の普及などの要因で、サラリーマン・学生・知識人などが新中間層を形成していき、彼らがこの時期の文化の担い手となったのである。

2)教育・学問

1918年、**大学令**が出され、大学への進学率は次第に増加してきた。義務教育就学率も1920

年には 99%となった。また、大正デモクラシーの影響で、自由主義教育がはじめられ、生活綴方教育など斬新な教育実践が行われるようになった。

学問では、1917年に理化学研究所がつくられた。また、本多光太郎がK S磁石鋼を発明し、八木秀次が八木アンテナを発明した。野口英世は黄熱病などの伝染病研究を行い、成果をあげた。人文・社会科学の分野でも、**西田幾太郎**が『善の研究』を著し、ドイツ哲学と禅宗を主とする仏教的世界観との融合を試みた。また、田中王堂は、プラグマティズム哲学の研究を行った。歴史学では、中国古代史・中央アジア史研究に成果をあげた白鳥庫吉、白鳥の弟子で、日本古代史を実証主義の立場から明らかにした**津田左右吉**がいる。また、庶民（常民）の生活・文化を研究する民俗学を体系づけた**柳田国男**や民衆の工芸に魅かれて民芸運動を行った**柳宗悦**がいる。さらに、マルクス経済学を講義した河上肇も活躍した。

3)文学

文学では、学習院出身者の文学者団体、**白樺派**が人道主義的文学を創作した。その代表者の一人武者小路実篤は、『その妹』・『友愛』を著し、**志賀直哉**は、『和解』・『城の崎にて』などを著した。有島武郎は、自殺に至るまで自己と社会との調和をめざし、『或る女』・『宣言一つ』などを記した。

白樺派と同じ時期に活躍した**永井荷風**は、大逆事件の際、何も抵抗できなかった自分を批判し、戯作者という位置づけを自らに課し、『腕くらべ』・『冷笑』などを著した。谷崎潤一郎も『刺青』・『痴人の愛』などの耽美主義の作品を発表した。さらに、『新思潮』に集まった若い作家たちも文学界に新風を吹き込んだ。その代表者である**芥川龍之介**は、『羅城門』・『鼻』・『河童』において、菊地寛は、戯曲『父帰る』などを著した。

マルクス主義の広がりと共に、プロレタリア文学も台頭した。1921年、青野季吉らが創刊した『種蒔く人』からはじまった文学運動は、『文芸戦線』や『戦旗』などの雑誌に作品が掲載された。

こうした文学とは別に、新聞・雑誌などへの連載を通じて庶民の心をとらえた大衆文学も生まれた。中里介山は『大菩薩峠』で、大仏次郎は『赤穂浪士』・『鞍馬天狗』を発表した。

1930年代に入ると、感覚的な表現の中に文学の実態を求めようとする新感覚派の文学者が活躍する。『日輪』・『機械』などを著した横光利一や、『雪国』を著した**川端康成**がその中心であった。

4)美術

1907年、文部省美術展覧会（文展）が開催され、日本画・洋画・彫刻の枠を越えた美術展が開かれた。その後文展は、1919年に改組され、帝国美術院展覧会（帝展）となった。日本画でも横山大観らは、1914年、日本美術院を再興し、小川芋銭・安田靫彦らは日本美

術院展覧会（院展）に作品を発表した。洋画では、1912年フューザン会が岸田劉生らによって結成された。また、1914年には文展に批判的な若手画家が二科会を結成した。このグループには「紫禁城」を描いた梅原龍三郎や「金蓉」を描いた安井曾太郎らがいる。

彫刻では、父光雲の後を継ぎながらもロダンの影響を受けた作品「手」を作った高村光太郎がいる。

5)演劇

1924年、小山内薫は、ドイツから帰国した土方与志と協力して築地小劇場を創立し、新劇の普及に努めた。また、大衆に受容された映画の普及もめざましかった。1896年「活動写真」の名で輸入された映画は、1912年、日活が設立され、日本でも本格的な映画が製作されるようになった。この頃の映画はまだ無声映画だったが、1931年頃にはトーキーとなった。

6)大衆文化

花形はラジオであろう。1925年に開始されたラジオ放送は、翌年には20万人の聴衆者を数えるまでになり、日本放送協会がつくられた。また、レコードも大量に売れはじめた。活字文化でも新聞が普及した。また、滝田樗陰が発行した『中央公論』や山本実彦が発行した『改造』、大日本雄弁会講談社が発行した大衆雑誌『キング』、菊池寛が発行した『文芸春秋』が読者を広げた。これ以外には、石橋湛山が編集者として活躍した『東洋経済新報』も知られている。また、改造社が一冊一円で全63巻の『現代日本文学全集』を発行し、円本ブームを起こした。

文化については、1945年以降の文化についても触れる必要があるのですが、出題率も低いということから割愛します。どうか文化史嫌いはなおしてくださいね。